

「探究」を通じて
資質・能力を育む

実践事例●広島県立広島高校

どの力を使って、何を探究するのかを、 毎授業で提示し、学びの質を高める

広島県立広島高校では、広島県からの研究指定を受け、教科学習や「総合的な学習の時間」で課題発見・解決学習を展開している。育成を目指す16項目のコンピテンシーを定義し、授業シラバスには各単元で活用するコンピテンシーを明示。学校全体で資質・能力の育成を図っている。

取り組みの背景

ユニバーサルデザインの考え を取り入れ、授業改善を推進

広島県南西部の呉市に位置する広島県立広島高校は、毎年約100人の国公立大学合格者を出す、地域の進学校だ。2015年度から、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト活用コアスクール」の指定を受け、資質・能力の育成を目指す授業づくりを研究している。その下地になっているのは、以前から進めてきた授業改善だ。

13年度、特別支援学校から着任した当時の校長の提案で、ユニバーサ

ルデザインの研究に基づいた授業づくりが取り入れられた。例えば、授業中に生徒の気が散るのを防ぐため、掲示物は教室の後ろに貼ることにし、黒板の周りにあるのは時計だけにした。また、生徒が授業の全体像を把握し、今授業がどの段階まで進んでいるのかが一目で分かるよう、黒板の左端にその時間の学習目標と学習項目を書き出し、終わった項目に斜線を引くようにした。教務主任の上川康介先生は、そのねらいを次のように説明する。

「本校には多様な生徒が入学しています。そうした生徒が授業に集中できる環境を整えることは、すべて

の生徒にとってよいことだと考え、学校全体で取り組むことにしました」

14年度には、広島県立教育センターのサテライト講座を利用して、研究授業に関する手法を学び、自分の担当教科の教師と他教科の教師1人ずつの計2人の授業を参観し、指導の工夫を学び合う「相互授業観察」を始めた。教務部の大本順一先生はその意図をこう語る。

「本校では、例年5〜6人の教師が入れ替わり、新採の教師も毎年のように赴任します。新しく来た先生方に早く本校の指導スタイルに慣れしてほしいという思いから、他教科の

授業も含めて見てもらうことにしました。生徒の実態は担当教科の授業の様子だけではつかみ切れるものではないので、本校の赴任歴の長い教師にとっても、他教科の授業観察は効果的でした」

相互授業観察では、参観者自身が観察する生徒を1人決め、その生徒の発言や表情、教師とのかかわりなどを授業観察票に書き込みながら、指導のポイントをつかむ。そして、授業後の振り返り会では、参観者が生徒の変容を報告し合い、効果的だった指導について話し合うという方法にした。すると、初回から、生徒がさらに学びを深めるためにはど

広島県立広高校

◎校訓は「敬虔 自律 友愛」。文武両道を校是とし、学習と部活動の高い水準での両立を目指している。剣道部やハンドボール部、バスケットボール部、放送班などが全国大会に出場。2015年度から3年間、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」活用コアスクール」指定校。18年度、広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校。

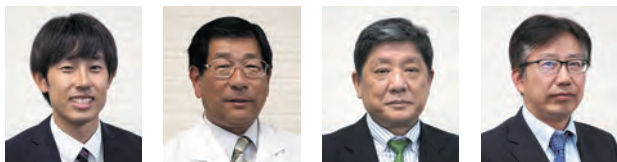
◎設立 1942（昭和17）年

◎形態 全日制・定時制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約200人（全日制）

◎2018年度入試合格実績（現浪計） 国立大は、千葉大、大阪大、広島大、九州大、県立広島大、広島市立大などに102人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ400人が合格。

◎URL <http://www.hiro-hiroshima-ed.jp/zenichi/index.html>



広島県立広高校教頭
川中延晃 かわなか のぶあき
教職歴32年。同校に赴任して1年目。

広島県立広高校
上川康介 かみかわ こうすけ
教職歴34年。同校に赴任して8年目。教務主任。

広島県立広高校
大本順一 おおもと じゅんいち
教職歴36年。同校に赴任して5年目。教務部。

広島県立広高校
森光智洋 もりみつ ともひろ
教職歴6年。同校に赴任して2年目。教務部。課題発見・解決学習推進リーダー。

うすればよいかといった前向きな議論が活発にされたという。

同校がそうした授業改善を進める中、14年12月に広島県教育委員会が打ち出したのが「広島版『学びの変革』アクション・プラン」だ。同事業は、県内の全公立学校に対し、資質・能力（コンピテンシー）の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動として、課題発見・解決学習や異文化間協働活動を積極的に推進することを目的としている。

その研究指定を受けた同校は、校長・教頭・教務主任・中核教員・各教科代表等による「『学びの変革』プロジェクト」を（以下、変革プロジェクト）を設置。社会で求められるコンピテンシーを独自に定義し、それらの育成に向けて、各教科の授業や「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）で課題発見・解決学習を実践してきた。今回は、その中でも各教科の授業づくりに着目して見ていく。

育成を目指す資質・能力の定義 コンピテンシーの16項目を 教育活動全体で育む

同校が育成を目指すコンピテン

シーは、知識（CK）、技能（CS）、態度（CA）を核となる要素とし、CSとCAは各8項目（計16項目）からなる（図1）。以前OECDが実施するテストに参加した経験から、そのキー・コンピテンシーを参考に、変革プロジェクトが定義した。上川先生は、定義されたコンピテンシーを初めて見た時をこう振り返る。

「担当科目の化学の授業を考えた時に、活用場面が浮かばなかったのが『②セッション』です。それは結論を求めない議論ということですが、化学においてはどのような議論になることなのか想像がつかみませんでした。ただ、1年間のどこかで、どのコンピテンシーも使う場面を設定したいと考えました」

コンピテンシーの育成場面について、大本先生は次のように説明する。「教科の特性に応じて、授業の進め方や生徒の学び方には違いがありますが、そこで、学校全体で、この16のコンピテンシーを育んでいけばよいと捉えています」

図1 広高校が定義したコンピテンシー

核となる「知識」Core Knowledge [CK] 思考の基礎となる各教科の「知識」				
核となる「技能」 Core Skill [CS] 情報の獲得や他者との意見交換に係る「技能」	合意形成系統 (ほかの人と話し合い、意見を交わすこと)	①ディスカッション ②セッション ③ペアワーク		
	調査検証系統 (課題について調べ、結論を導き出すこと)	④スタディースキル ⑤リサーチスキル ⑥スピーチスキル		
	思考表現系統 (論の正しさを考え、自ら正しく表現すること)	⑦ロジカルシンキング ⑧ライティング		
	核となる「態度」 Core Attitude [CA] 他者との意見交換に係る「態度」	協働系統 (ほかの人とともに活動する場合に必要なこと)	⑨協調性 ⑩柔軟性 ⑪適応力 ⑫忍耐力	
			⑬回復力 ⑭リーダーシップ ⑮積極性 ⑯責任感	
			統率系統 (ほかの人を率いて課題を解決する場合に必要なこと)	

* 学校資料を基に編集部で作成

教科と「総合的な学習の時間」の両輪で徐々に高める

コンピテンシー育成に向けた授業構想は次の通りだ。

各教科では、活用すべきCK・CS・CAを示した上で授業を進め、単元や題材のまとまりでパフォーマンス課題に取り組ませる。そして、総合学習では、各教科の授業で獲得したコンピテンシーを活用しながら問題解決学習に取り組む(図2)。課題発見・解決学習推進リーダーの森光智洋先生は、次のように語る。「各教科の授業と総合学習の両輪を、第1学年かららせんの広げていくことで、徐々にコンピテンシーが高まることを期待しています。各教科の授業や総合学習の進め方は、基本的に3年間同じですが、コンピテンシーの高まりに応じて、課題の内容や問題解決の手法をレベルアップさせていきます」

なぜその力が必要なのか
体験によって理解を深める

CS・CAについては、生徒にそ

れぞれの趣旨を理解させるため、第1学年1学期の総合学習で、各コンピテンシーの活用を一通り体験させる。例えば、「②セッション」は、結論を求めるものではなく、グループ内で意見をしっかりと出し合うことだとルールを説明した上で、実際にテーマを出してグループでセッションをさせる。

「第1学年の1学期から授業でCSやCAを活用しつつ、総合学習でしっかり各

コンピテンシーを理解させる機会を設けています。コンピテンシーの趣旨が十分理解できれば、授業でも目的意識を持って活用できるようになるからです」(森光先生)

CAについては、外部団体によるワークショップを行う。ペアで褒め合う、話が途切れないように接続詞を使いながら会話をするとといった活動を通して、協調性や積極性などを

図2 コンピテンシー育成を図るための授業構想

学年	第1学年		第2学年		第3学年	
課題	解決課題「地域」		解決課題「日本」		解決課題「世界」	
場	授業	総合的な学習の時間	授業	総合的な学習の時間	授業	総合的な学習の時間
4月		CS・CAの習得	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
5月						
6月						
7月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
8月						
9月						
10月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
11月						
12月						
1月		CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「日本」をテーマにしたグループによる課題解決学習	CKを基に、CS・CAを活用した問題解決学習	コンピテンシーを活用し、「世界」をテーマにしたグループによる課題解決学習
2月						
3月						

*学校資料を基に編集部で作成

体得していく。

「普段はおとなしい生徒が、ワークショップの最後に講師からマイクを向けられてすぐに活動の感想を答えた姿に、こんなにも変わるものと驚きました。ワークショップ後の授業では、グループワークを行う際、すぐに役割分担が決まり、スムーズに活動するようになりました」(上川先生)

各教科の授業づくり

何をどのように学ぶのか
生徒に明確に意識させる

各教科の授業では、課題発見・解決学習としてパフォーマンス課題を出し、コンピテンシーを活用して行う協働的学習を取り入れている。

◎授業シラバスの作成

教科のどの単元・題材で、どのコンピテンシーを活用・育成するのか、教師間で足並みをそろえるため、各学年で授業・教科ごとに作成する「授業シラバス」の「授業計画」の中で、授業の年間計画と各単元における主な到達目標(CK)、その単元で伸ばすCS・CAを明示した(図3)。

ワークショップ後の生徒へのアンケートでは、CAの「積極性」「適応力」「柔軟性」「協調性」を学べたと答えた生徒がそれぞれ6〜8割いた。「自分の殻を破って楽しむことがとても楽しく、コミュニケーションの方法も分かった」といった声もあり、自分の感覚や感情のみを考える「殻」を破り、他者と「つながる」必要性を理解できたことがうかがえた。

図3 授業シラバス 第3学年「物理」の例

月	学習内容	単元ごとの到達目標 (CK)	CS (技能) CA (態度)	評価の観点				教科書
				知識	思考	技能	態度	
第1学期課題考査								
4	気体の状態方程式 気体分子の熱運動 熱力学第1法則 気体の状態変化と熱・仕事	気体の分子運動と圧力との関係を定性的に考えようとする。 気体の圧力が生じる原因を把握し、気体に関する各法則を考察することができる。 気体の状態方程式を用いて、さまざまな条件における気体の状態を考察することができる。 断熱圧縮・膨張を利用し、断熱圧縮でのエネルギーのやりとりを理解し、気体に関する法則や気体の状態方程式を、さまざまな条件において適用することができる。 [CK]	[CS] ① [CA] ①, ②, ③, ④	○	○	○	○	p.94 ~126
5	波の伝わり方 波の干渉と回折 波の反射と屈折 音波 ドップラー効果	波の基本的な特徴を理解し、正弦波の式を定性的に導出し、音が伝わるようにするに留意し、音波の反射・屈折・回折・干渉について考えようとする。 ホイヘンスの原理を用いて、平面波の反射、屈折を理解し、屈折のしくみを考え、音波の伝わる速さが音源の速度に依存しないことから、ドップラー効果によって変化する波長や振動数を考える。 [CK] 水波投影装置を用いて、平面波の反射、屈折の様子を観察し、反射の法則、屈折の法則を定性的に調べる。 音源や観測者が動く場合の音波の波長や振動数の変化について、式を用いて理解する。 音源や観測者が動く場合の音波の波長や振動数の変化について、式を用いて理解する。	[CS] ① [CA] ①, ②, ③, ④	○	○	○	○	p.134 ~174
第1学期中間考査								

*学校資料をそのまま掲載

授業シラバスは、生徒にも配布。生徒自身にも「CKを獲得・活用するために、どのようなCS・CAを用いるのか」を意識させることによって、目的を持って授業に臨めるようにしている。

さらに、毎回の授業では、その授業での到達目標のCKと、活用するCS・CAを、黒板の左上に提示する(図4)。ここでも、ユニバーサルデザインの考えに基づき、授業内で学習内容と習得の方法を教師と生徒が共有し、学習を進めやすくしている。

社会とつながりのある課題や思考を深める課題を出す

◎ パフォーマンス課題の内容

パフォーマンス課題は、社会とのつながりを意識した「実の場」を設定したり、思考を深める問いを出したりして、単なる体験活動とならないようにしている。

「そうした課題は、活用する知識が蓄積されていなければ、思考が深まりません。パフォーマンス課題は毎回の授業で取り組ませるわけではなく、単元や題材のまとめで取り

組ませています」(上川先生)

パフォーマンス課題の具体例を紹介する。上川先生は「化学」の授業で、「無色透明の4種類の水溶液を識別する」という課題を出し、グループで取り組ませた。生徒にはやり方を一切示さず、試験管は何本使ってもよいとだけ伝えた。

「生徒たちは、樹形図を描いたり、対応表を作成したりと、いろいろな方法を試していました。途中で、私が『先生は試験管2本で分かったよ』と言うと、生徒は驚き、一層熱心に考え、話し合っていました」

また、体育の授業では、「マット

運動を全員ができるようになる」という課題を出した。自分たちの演技を撮影し、うまくできた人できなかった人との演技を見比べ、その違いを見いだし、どうすれば全員ができるようになるのかを話し合っていたと言う。

どの教科でもよく見られるのが、「他者に説明する」という設定だ。例えば、国語では、「こども銀行券で買い物しようとした小学生に、紙幣の価値をどのように説明するか」という課題が出された。状況を明確に設定することで、生徒はよりリアルに考えられる。

図4 CK・CS・CAの提示 第1学年「数学」の例



黒板の左上に、その授業のCK(知識)、その獲得に向けて活用するCS(技能)、CA(態度)を提示し、生徒が常に目標を意識できるようにする。写真の授業は、中間考査に向け、展開と因数分解の演習にグループで取り組むという

内容であり、習得する知識として、展開・因数分解の方法、公式を挙げ、また、活用するコンピテンシーには、ロジカルシンキングと協調性が挙げられた。なお、ユニバーサルデザインの観点で学習環境を整えているため、黒板の横や上には、掲示物が一切ない。ただ、3年生の教室では掲示物が多いため、黒板の横にも貼ってもよいことに、授業中はスクリーンを下ろし、掲示物が見えないようにしている。

◎評価方法

パフォーマンス課題の評価は、ルーブリックを基に行う。ルーブリックは、課題そのものではなく、活用するコンピテンシーが本時の課題に取り組み中でどう変化すること、をねらうのかを5段階で示すようにした(図5)。到達目標は「5」だ。

また、生徒による自己評価も行う。17年度は、ノートに貼った自己評価表に毎時間チェックさせ、6月と12月にはコンピテンシーの活用度のアンケートを行い、総括的に振り返りをさせた。18年度は改めて自己評価の方法を見直すこととし、月1回の自己評価と、年2回のアンケートとした。

「日々の記録はつげなくても、内省できるように、授業の終了時に再度、授業の目標を復唱し、それを活用できたのかを振り返るよう、声かけをしています」(森光先生)

授業研究の工夫

簡易授業案で負担を軽くしつつ、中身の濃い互見授業に

各教科の授業づくりで大きな課題となったのは、パフォーマンス課

題の設定とそれに伴うルーブリックの作成だった。そこで、16年度からは研究授業の方法を改め、異なる教科の教師4〜5人で1グループとなり、相互に授業を観察し、教科を超えて共有できる点や生徒の状況から評価できる点、改善すべき点を議論するようにした。

具体的には、パフォーマンス課題づくりに必要な基礎知識の確認と、変革プロジェクトのメンバーによる模範授業で全体像をつかんでから、相互授業観察を実施。授業担当者の負担軽減も考慮した簡易指導案「STP」(図5)を用いて授業を見る視点を明確化し、異教科間でも議論が活性化するようにした。その授業観察を各教科内でも行い、全教科各1人が公開研究授業を実施した。

「異なる教科という多様な視点で議論することで、課題設定のポイントをつかめました。また、以前からの授業観察を通して前向きに議論を行う意識が教師間に定着していたので、発展的な意見が数多く出されたものも有意義でした」(大本先生)

16年度は「実の場」の設定とルーブリックづくりを、17年度は「思考」の深まりを問う課題の設定とルーブリック

図5 STP (Simple Teaching Plan) の例

教科	国語	科目	現代文B
指導者		指導教室	2年 組
指導日	平成29年	指導時間	9:38 - 10:28
単元名	評論「ホンモノのおカネの作り方」(岩井亮人)		
つけたい力	ことばの意味を定着する力		
活用するコンピテンシー	【核となる知識=Core Knowledge】 既知知識の先入観にとらわれることなく、必要な情報を文脈から読み出し整理・理解する。 【核となる技能=Core Skill】⑤ リサーチスキル 【核となる態度=Core Attitude】⑧ 柔軟性		
課題	あなたはスーパーマーケットの店員です。ある日ひとりの子どもが来店し、レジで駄菓子1つを出して、「この駄菓子で支払おうとした。あなたは「それは法外なお金」ではないから支払えないんだよ。」と伝えたところ、その子は、「この前お母さんは、スーパーの買物券で100円のお菓子を買ってくれたよ。」と答えた。ここであなたは子どもに「法外のお金」とは？」を説明しなくてはなりません。あなたならどのように説明しますか？評論「ホンモノのおカネの作り方」(岩井亮人)を参考にし、平たもわかるように説明してください。		
思考を深める問い	【「ホンモノのおカネ」とはどのようなものだろうか？		
活用するコンピテンシーに対するルーブリック	5 資料から必要な情報を適正に選り出し、わかりやすく整理した上で記述できる。 4 資料から必要な情報を部分的に選り出し、わかりやすく整理した上で記述できる。 3 資料から必要な情報を部分的に選り出し、おおむね整理した上で記述できる。 2 資料から必要な情報を部分的に選り出し、整理しようとする上で記述できる。 1 資料から必要な情報を充分選り出しておらず、整理も不十分な上では記述はできない。		
	学習活動	指導	指導上の留意点
導入	「お金」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。	自身の生活を考え、ペーパーをさせ、解決すべき課題を確認させる。	「日本銀行券」はそのものが価値を持つのか、思考を促す。
展開	課題解決のための教材を読み、「お金」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。「ホンモノのおカネ」とは何かを考える。	手がかりを確保し、個人内思考を促す。資料のまとめるワークシートに行わせる。	「本物」×「ホンモノ」がどのような意味を持つのか、ヒントを伝えながら思考を促す。
閉鎖	各自まとめたものを持ち寄り、4名1グループで「ホンモノのおカネ」とは何かを考え、ことばで説明させる。	ディスカッションにより、議事録資料にまとめる。完成したものをグループ全体に説明させる。	グループを促進しながら、時間制限をつけて発表させる。
まとめ	最終に「ホンモノのおカネ」とは何かを考え、解決すべき課題を確認する。	質疑応答「子ども」という言葉の知らない人物にどうなるか、考えてみるよう物語る。	

授業案を簡易な形式にし、教師の負担を軽減。特に見てほしい場面には、「★」をつけた。*学校資料をそのまま掲載

リックの統一をテーマにし、課題設定のイメージと評価方法の統一が図られた。

「総合的な学習の時間」の内容

生徒が自ら課題を設定し、調べ、分析し、方策を考える

総合学習で行う課題解決学習では、第1学年は「地域(広地区・呉市・広島県)」、第2学年は「日本」、第3学年は「世界」の課題を発見し、調査・研究をして具体的な方策を提案する。基本的な流れは次の通り。まず、生徒個々にテーマに関する

疑問を挙げ、似た疑問を持つ生徒4〜5人でグループを組む。そして、グループで課題を1つ設定し、調査や分析を通して方策を考え、最終的にはポスターにまとめて、クラス内で発表する。

課題設定は生徒に委ねられており、担任はアドバイスする程度だ。これまで、急増している外国人観光客に対応するための英語の観光案内冊子を作成したグループや、子どもの安全を守るために地域の危険マップを作ったグループなど、自分たちの身の回りに引き寄せた課題が多かったと言う。

「市内にシャッター街が多い理由について、自分たちでポイントメントを取って商店街の会長に取材に行ったり、解決策の裏づけとなるデータを取ろうと他クラスに調査を行ったりと、生徒たちは想像以上にCSやCAを發揮しています(上川先生)」

これまで学級単位でのグループ編成だったが、さらに多様な他者と協働できるよう、18年度第1学年では学級混合のグループ編成を検討中だ。

成果・展望

疑問に思うことを主体的に探究しようとする生徒たち

以上のような取り組みの結果、教科の授業においても、探究心を持って主体的に学びに向かう生徒の姿が見られるようになったと、上川先生は手応えを語る。

「化学反応の解説で、以前は生徒から質問も出ず、すーっと進んでいたのが、今では『なぜこの場合は酸性なのですか』『この結合のここはなぜ違うのですか』など、立ち止まって考える生徒が出てきました」

大本先生も、生徒の変化を実感している。

「大学入試の出題頻度がそれほど高くない分野は、以前の生徒は関心がありませんでした。ところが、原子力発電についてのパフォーマンス課題を行った時、生徒から『原子力発電の問題について、先生はどう考えますか』と質問され、大いに議論が盛り上がりました。入試の出題頻度に関係なく、自分が関心を持ったことを追究する姿勢が育ってきていると感じています」

コンピテンシーの高まりは数値にも表れている。年2回行われる、生徒が行うコンピテンシー活用^①の自己評価では、CS・CAとも、前期より後期、第1学年より第3学年の方が平均値が高く、コンピテンシーが着実に育まれていると言える(図6)。

コンピテンシーの見直しと自己評価の精度向上が課題

今後の課題の1つはCS・CAの見直しだと、森光先生は語る。

「3年間の運用を経て、数が多い、ほかの項目を入れたいといった意見も出てきています。ここでいまま一度見直し、生徒・教師ともに分かりやすいコンピテンシーにしたいと考え

ています」

評価方法の改善も課題の1つだ。生徒は力がついていればそれでよいと捉える傾向があり、できたこと・できなかったことの双方を捉え、次にすべきことを自分で考えられる振り返りには至っていない。

「コンピテンシーのすべてを、高校時代に身につけなくてもよいと思っています。目指すのは、主体的に疑問を解決する力です。そのため、自己評価の精度を上げる指導を考える必要がありますし、授業に一層深みを出すために、私たち教師のスキルをさらに向上させていきたいと思えます」(上川先生)

今後の展望について、川中延晃^{のぶあき}教頭はこう語る。

「中核教員を中心に、3年間、組織的に研究に取り組んできた成果が、生徒の姿に表れています。相互授業観察を通して学校全体で学び合うとともに、外部の力を借りながら進めてきたことも、成功の要因

図6 コンピテンシー活用^①の自己評価(2017年度前期・後期)

	核となる技能 CS			核となる態度 CA	
	合意形成系統 (①ディスカッション、②セッション、③ペアワーク)	調査検証系統 (④スタディースキル、⑤リサーチスキル)	思考表現系統 (⑥スピーチスキル、⑦ロジカルシンキング、⑧ライティング)	協働系統 (⑨協調性、⑩柔軟性、⑪適応力、⑫忍耐力、⑬回復力)	統率系統 (⑭リーダーシップ、⑮積極性、⑯責任感)
*数値は前期/後期					
全学年平均値	4.36 / 4.50	4.05 / 4.28	4.03 / 4.25	4.32 / 4.43	4.04 / 4.17
第3学年平均値	4.55 / 4.73	4.25 / 4.47	4.28 / 4.45	4.51 / 4.69	4.21 / 4.42
第2学年平均値	4.31 / 4.53	3.90 / 4.28	3.86 / 4.28	4.26 / 4.38	3.95 / 4.19
第1学年平均値	4.21 / 4.25	3.99 / 4.09	3.94 / 4.00	4.20 / 4.22	3.95 / 3.90
全学年・全系統平均値	4.16 / 4.33				
第3学年・全系統平均値	4.36 / 4.55				
第2学年・全系統平均値	4.06 / 4.33				
第1学年・全系統平均値	4.06 / 4.09				

各コンピテンシーについて、5件法のルーブリックを設定。選んだ数値の平均値を算出。 *学校資料を基に編集部で作成

でしよう。教師の入れ替わりがある中、同じ成果を出すのは容易ではありませんが、継承するものと見直すものを見極め、取り組みをさらに進化させていきたいと思えます」